

088686-000-6

特67-785

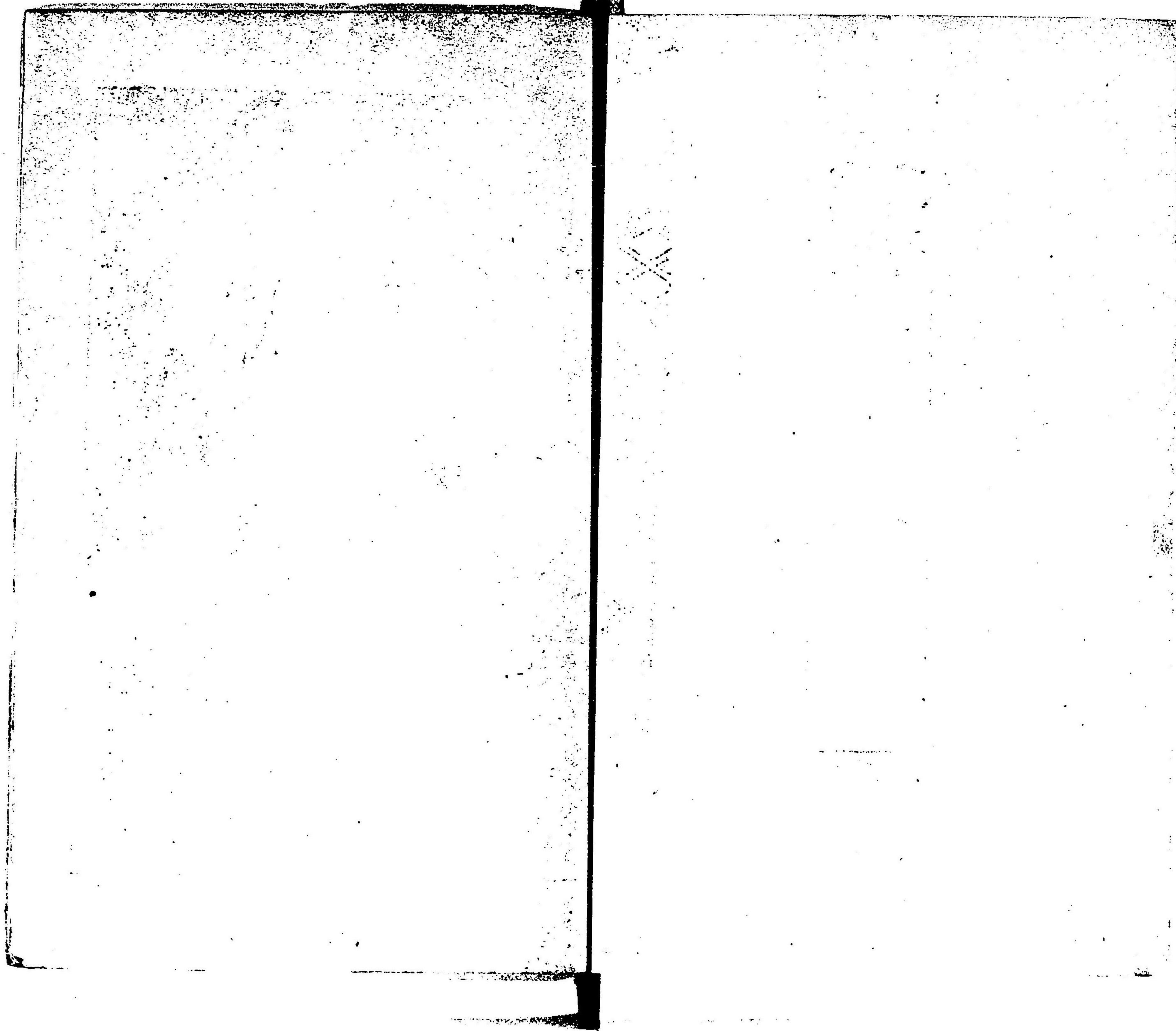
天目山

西村 天囚(時彦) / 著

M24

DBJ-0345







武田信勝  
土屋惣蔵  
天目山小敵を  
禦す圖

天目山

謹告

言狂切大 言狂切 言狂中 言狂前

五腕天先  
變化守山萩

役割

右來春一月一日より開場仕 候問四方の御客様賑々敷御 光來被下度奉願上候以上	八勝勝	五勝	渡邊	武田	白拍子	齋の加藤	榮御	信部	跡部	長坂	高松	桔梗
	元	化	民部	信勝	太	前	忠	大炊	入道	尾	島	前
	鶴	之	助	榮	次	郎	花	治	郎	郎	蝶	郎

浪花座主 敬白	沖屋	温井	秋山	阿部	外記	男之	政	仁	土
	妻	常陸	紀伊	加賀	左衛門	内膳	木	木	屋
	一	助	守	賀	助	膳	正	正	藏

敬白

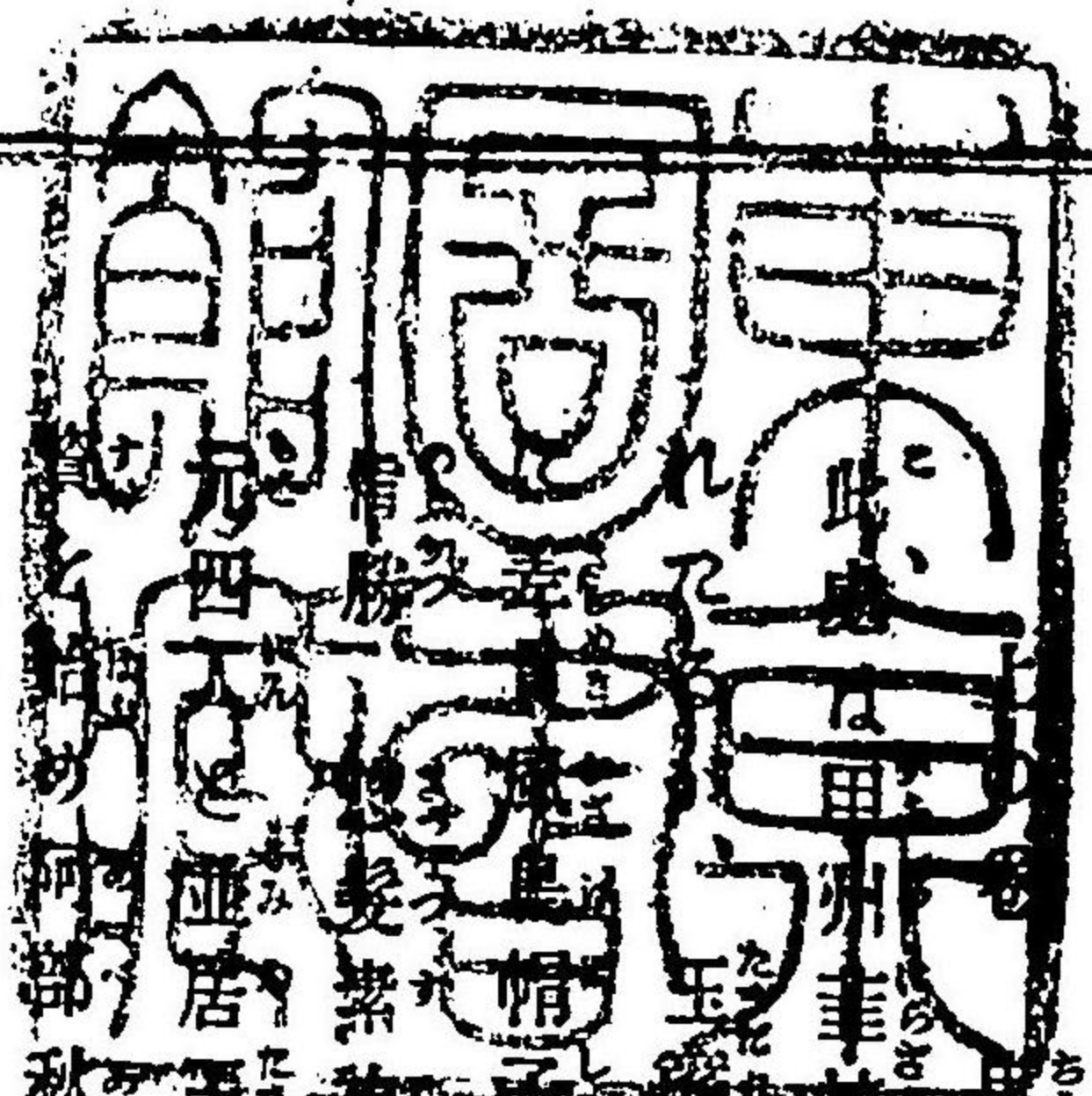
緒言

此の天目山の一篇は曩に我浪華文學會の編輯に係る文學雜誌にはびた第壹號に掲載せしものなり今浪華座主の演劇に仕組まんと請ふよより乃ち改作して脚本と爲せり余も實に演劇門外漢なり脚本を作りしは此篇を以て初陣と爲す去れば予も自ら其實地に演じて面白く手ぬかりなかるべきやと知らず但事實は歴史に泥まされ歴史を離れて歴史に合はんことを期したり小宮山友信の諫言は予が假構に出で後の田野の忠節に襯映せしめ土屋昌恒子と刺し妻を逐ふ一場の惨劇は理慶尼の記に據りて歴史の遺を補へり掬甲の禮に鎧親は實に秋山光次なれとも小宮山に作りしは其一場の大立物なるが故に重を此に歸せしめんが爲なり勝頼の死は敵に刺殺されたる如く作れるもあれど今理慶尼の記に従ふて自盡の事となせり讀者請ふ此の意を諒せよかし

天 囚 居 士 しるす

演劇 天 目 山

天 囚 居



臣の諫言  
御館あり、御庭には老樹の櫻今日をさかりに咲乱  
正面に武田四郎勝頼狩衣の袂もたか  
胸息にもたれおわします、左手に太郎  
右手には御臺所桔梗の前、色よき衣をかさね、腰  
御前には長坂入道調閑、十得袴、跡部大炊介勝  
烏帽子半素袍にて坐したり、管絃に  
て幕明く、  
調「比しも彌生の初めつかた今をさかりに咲出たるオ々の梢の花盛り  
跡」のせけきながめを御肴に我君には先づ

演劇脚本天目山

皆々「一献すさせ玉へ

勝「いでや一献すござん

ト宣ふに、腰元一人は三寶に三組の盃を、一人は長柄の銚子をと  
とげいで、勝頼に奉れば、勝頼盃をとりわけて、風音と共に散る  
花をさがめ、

勝「いかに調閑、彼の風に驚かされて散る花を見よ、木の葉にひとしき  
織田勢の落足に似たるぞかし

調「げにく面白ささがめかあ、我君の御威光は疾さこと風の如し、今  
おも御出陣ましまさば、

跡「池にうかべる花の如く、屍をもて諏訪の湖をも埋め玉はんは  
二人「眼前に在り

勝「いしくも申したりそれ盃取らせん、  
調「ハッ

腰元立ちて盃を執次き、酒を酌む、

勝「ハテわかぬながめかあ、誰そ一さし舞ふて興を添ゆよ、  
跡「心得候ふ、それ

腰「ト差圖すれば腰元下手に向ひ  
白「お次に扣はし白拍子急いで此へ

ト出来る、水子立烏帽子、太刀を佩きて扣れば  
腰「それ御用意

是より花やかなる歌鳴物にて白拍子舞ふ歌は未定稿舞いまだ終ら  
ざるに次の間に小宮山内膳正友信黒糸の鎧着て出来る、勝頼鎧の  
音を聞答め、

勝「鳴物止めよ  
ハッ

ト鳴物止み白拍子差扣ゆれば

勝「次の間に物の具の響するぞ、誰そやとうく罷出よ

小「イヤ思ふこと聞は申さぬうちは。いつか罷出まじ

ト云ひつゝ入來りて一坐を見渡し、呆れ果て、坐に就けば、人々

も是はと驚く、

調「ヤア貴殿は小宮山

皆々「内膳どの

勝「ヤア何者なるかと思へば、予が目通を遠ざけ置きし小宮山内膳から

すや、誰が許して此處へは來しぞ、君命を輕んずる不忠の臣、其儘

には置かじ

小「御勸氣の身には候らへども、臣として君の存亡を餘所に見るべき道

理なく、たとひ御佩刀を汚さば汚せ、息あるうちは御奉公第一と存

じ、軍評定の席にも加はらんものと、推參仕りて候ふ

勝「きんと申す

ト氣色をかぬ玉へば、小宮山進出で、勝頼に向ひ

小「今日此比は君を始め奉り、譜代恩故の人々、薪に臥し膝を嘗め、軍

議に夜の目も合はし玉は亥と推察し奉りしに、血迷ひ玉ひしか我君

命惜しきか人々、敵四隣に迫りし今日只今、何と覺してか此の御遊

は候ふらん、呆れて物も申されず、偕も君いまだ木曾殿の謀叛知ろ

しめさすや、人々いまだ諏訪の軍敗れて高遠の城も危うきを見玉は

すや、昨日今日の味方の敗北、よも忘れ玉ふまぞ、御家の存亡眼前

に迫りしを、知らぬ顔に花見の御宴、歌舞音曲のたのしみ、餘りと

申せば御情を、いとかしこけれども御父故大僧正信玄公、いまだ

晴信と名乗り玉ひ、始めて甲斐の御主となり玉ひし時、やゝ御心懸

らせ玉ひ、宴樂ふふけり、詩歌風流の道にすさみ玉ひけるをだに、

いと嘆かはしき事に思ひて、板垣駿河御諫言申せしかば、忽ち御後

悔ありて、國の掟に御心を用ひ玉ひぬ、去ればこそ甲州の武威日々  
に加はりて、向ふ所敵なく、川中島三度の大戰、其外大小數十戰、  
一度も打負け玉はざりけれ、然るに君が代に至り、一たび長篠に敗  
れ、二たび桔梗が原に打負け、三たび諏訪に敵に後を見せ、城を失  
ひ玉ふこと數しれず、信玄公以來の猛將勇卒、今は十分一も存せず、  
是れ御驍は父君にまさり玉ひて、御内に板垣駿河なればあり、驍  
者は君が身を焚く烈火にして、御前に候ふ長坂跡部は驍奢を煽ぐ扇  
あり

長跡

小「火は早や御眉につき候ふ、雨崩牆の中に起らん、疾くく長坂跡部  
が首を刎ね、盃を地上に抛ち、樂器を池中に投じ玉ひて、防禦の用  
意を怠り玉ひそ  
ト云ひつゝ、涙を揮つて諫め奉れば、始終無念の思入わりし勝頼此

時くわつと怒り

勝「やをれ内膳、勘氣の身として推參させしばかりか、臣として君をさ  
みする條奇怪千萬、抑兵法の奥義と云ッば、靜なるは林の如く、疾  
きことは風の如し、と云ふ一語に在り、敵押寄せんにおどろきまどは  
んは勇將にあらず、靜に謀をめぐらして疾く打退けんこと、我方寸  
の中に在り、汝が卑怯の心より、あわてふためき、先君をさへ引奉  
り、我を暗愚者のやうにさみすること不届かれ、不届者の成敗覺悟  
せよ

ト御佩刀に手をかけてをどりくるひ玉へば、御臺所信勝共々にす  
がり止めて

信勝「此ははしたさき御振舞、忠義一圖の心より諫め奉る小宮山内膳  
御臺「お手討どはか情なし  
二人「まづく御心静め玉へ



勝「どめなく」

小「さてく御運の末に候ふ、生ながらへて何かせん、疾くく一命召させ玉へ」

勝「言ふにや及ぶ」

信「アイヤ父上しばらく、彼は武田譜代の忠臣、打棄玉は、無道の君よと、世上の沙汰、未代の批判のみあらず、人心離れ、幕下背き滅亡立どるるに至るべし、

御臺「たつて御手討遊さば、妾を先に御手づから」

勝「ナント」

御臺「内膳が諫は理の當然、御用さきのみあらず、御手討とはれ情なし、此義は平に」

二人「止まり玉へ」

ト止められて連に切かね、遂に刀を投棄て」

勝「結繩の前が斯くまで申さだむる上は、エ、命ばかりは助け遣はす、とくく失せう」

ト坐到就けば、信勝御臺は胸撫下し

御臺「ハ、御止まり遊だすとか、それ阿部秋山温井の三士」

信「内膳を引立よ」

三人「ハッ御立候らへ」

小「ハテ情なき君の御心」

二人「御立ち候らへ」

ト引立られてせひなく退出すれば、長坂跡部二人は顔見合せて打うあづき

調「小さかしき奴の可惜御坐興をさまたげ候ふ」

跡「とく御盃を改め、今一献すさせ玉へ」  
勝「オーつげく」

ト腰元に酌ませて盃を取上げし時、戦ひつかれけんを覺し、一人の武者、あわたりしう馳來りて階下に絶倒すれば、一坐是はと驚く中に

信「誰ぞそれ呼生けよ」

三人「ハッ」

ト阿部秋山温井の三士出來り、介抱す

調「コリヤ甘利采女、戦ひつかれし其さま心元なし、軍の次第

皆々「あんどく」

甘「高遠の城も落ちて候ふ

勝「ナニ高遠落城せしとか

跡「シテ人々は如何に

甘「城將仁科五郎信盛を始め、小山田備中守昌辰、渡邊金太夫照、其外名ある武士妻女に至るまで、本丸の木戸押開き、むらがる敵の真只

中に切て入り、切てく切死したり、

信「スリヤたのみ切りたる高遠の

跡「要害さびしき堅城も

調「守るにかひなく落城して

阿「アノ鬼神と呼ばれたる

温井「仁科殿を始として

秋山「其外小山田渡邊以下残らず討死

皆々「いたせしとか

甘「勝誇りたる織田勢、信忠を大將に、木曾を案内として、雲霞の如く

責寄せ、ひしくと此の新府を追取圍み候らへば、いそぎて防戦の

手配あらまほし、イデ某は物見せん、去らば

トばかり飛んで行く、跡に人々顔見合せ、呆れ果たりしが

勝「ム、云甲斐なき味方の者共、高の知れたる織田勢に、攻落されしか

十 無念に堪へぬを見て入道進出で

調 去年十二月此の新府に移り玉ひてより、いまだ日數へねば、城の深も深からず、壁も全からず、此處にて防ぎ戦はんこと覺束あし、御尋慮如何に

信 今は早や何處に落ちたりとも、命全からんこと思もよらず、名ある

弓取の家に生れ、雑兵の手に死あんこと口惜し、此の城に火をかけ、新羅公より傳はれる旗も楯無の鎧も、我身諸共に焚死なん、

跡 左様には候らへども、勝敗は時の運なり、恥を忍び節を屈して、御運の開かん時を待ち玉らんこそ名將なれ、小山田左兵衛の佐が在所都留の郡岩殿山は天然の要害、天下勢攻寄せゆども一持ち持つべき處に候ふ、一先づ彼處へ御供申さん

調 其義尤然るべう存ぞ候ふ  
土 アイヤ其評義曲事あらん

皆々「あんど

ト云ふとき土屋惣藏昌恒侍鳥帽子腹巻直垂のまゝにて出来るを見

調 貴殿は土屋昌恒

跡 何故ありて此の評義を止めしぞ

土 さん候ふ岩殿の要害、宣ふ如くあらんには極めてよし、去りながら只今真田安房守昌幸それガしまで申出で候ふには、我在所吾妻の城こそ屈竟の要害、剩さへ兵糧に事かゝす候らへば、たとひ何百万騎攻寄せ候ふとも、攻落されんこと思もよらず、某が命は御馬前の露と、かねて覺期罷在り候らへば、何方までも君の御先途見奉らんと其はくたのもしう申出候ふ、何卒真田をお頼みあらまほしう存じ候ふ

調 だまれ土屋、若輩の身として評義の妨げ、下れく

士「イヤ危急の場合に若輩老功の差別あらんや、忠義と存ぞて申出たる謀異、御賢察願ひ奉る、

跡「だまれ物藏、彼の眞田は新参もの、小山田の思故の國人、古参こそ情はあれ、新参は表裏測りがたし、何卒岩殿山へ御開きあらまはしう存ぞ候ふ

士「イヤ其おめがね違ひ申す、忠義は其人によること、新参古参の差別あらん答あし、殊に小山田は綱を賣り祿を盗む表裏の侍、新参あれども眞田昌幸、智勇兼備の義士と、同日の論にわらず

跡「又しても入らざる出過ぎ、強て妨いたさば其分には置かねぞ士「君の御爲に相成らねば、飽までお止め申す跡「スリヤどうあつても士「いかにも

ト三人互に挑み合ふと、御臺所制し玉ひて

御臺「イヤ待て三人、時も時、斯る急場きまばらに争論まじりあひ無用三人「ハッ

信「父上の御尊慮御臺「いかゞ思召され候ふや

ト問はれて思案に暮れたる勝頼は勝「一旦は蹈留りて切死とは覺悟したれど、調問大炊の兩人彼様に申す上は、一先づ岩殿に開城して、再び旗をひるがへさん

信「スリヤ父上にはどうあつても士「アノ岩殿へト云ふとき勝頼立ちて

勝「用意致せト云ふを木の頭よろしく暮

下の巻 天目山合戦

(一) 忠士の到着

此處は甲州天目山の麓ある田野と云ふ處あり、去程に勝頼父子新府を出で、都留郡岩殿山に入らんとし玉ひしも、小山田が變心の爲に入ること叶はず、駒飼の民家を指して落ち玉ひけれども、敵に路を遮ぎられて其も叶はず、今は進退維れ谷まり、落足しどろもどろにて、しばし御馬を此の田野と云ふ處に立て、やすらひ玉ふ、山の此方に田の字の紋の幕打ちたる外には、雑兵餘多焚火を圍みて張番をぞおし居たる、山嵐にて幕明く

○なんと皆の衆、岩殿山の要害をさして、新府韭崎を出た事は出たが小山田殿の俄の裏切

△お迎に來られる處か、夜討をして人質の老母を奪取り、譜代恩願の我君へ、弓引と云ふ人非人

×其から駒飼石見が家を目的に、かうして落ちては來たもの、敵は追々馳加はり、雲霞の如く行手を遮ぎり、

□味方は一人落ち、二人逃げ、四百騎が三百騎二百騎とあり、今ではヤット百騎居らすの味方の惣勢、

○是では逆も軍は出來ぬわい、併し物は相談ぢやが、こちどらも逃出さうぢやないか

×其がよからふ、イヤ、氣荒の大將ぢやによりて、もし逃そこさふて此首をころりどやられては大變ぢや、

△其ぢやと云ふて、かわい、女房や子供は、明日をも知れぬ命とは知らいで、今日は歸るか、く、と待ちて居るであらふと思出せば、

□可愛さうで悲しうあつてきたわい、  
はんに私も七十にゐる婆さんを殘して置たが、今にもおれが打死したら、誰も介抱して呉れるものはなし、麻難義をさつしやるである

皆々「ワア」

ト一度にどつと泣出せり、折から番所を見巡る長坂入道跡部大炊の兩人、實よき甲に身を堅め、白鉢巻して幕の中より出来り、雑兵共を乾度見て

調「其方共は何を申して居る、エ、又してもくかしましい故郷の噂をも武士たる者、門を出で、妻を忘れ、境を出て、家忘れ、戦場に出で、身を忘るゝが武士の心得、今更家と思ひ妻を思ふ未練者め

跡「今にもあれ敵押寄せあば、目貫のつゝかん限り戦ふて、叶はぬ時は討死せねば相成らぬぞ

皆々「へエ」

ト震ひおのゝく、入道は遙に彼方を見渡しして、

調「アレあれを見よ、彼處に見ゆる武者はこり、人馬の物音は敵か味方

か、よも味方にてはあらざ、跡「敵ならんに味方は小勢、如何にして防ぎ戦はん

ト兩人れのよきをそれつゝ、のびわがりく前面を見入るれば、雑兵共指さして

○「それ大將分ですらあの通り、喃皆の衆ト顔見合せてうあづき合ふを見て、兩人氣色をかへ

調「イヤ何ともない、こりや武者震と申して、如何ある剛の者にもある習ぢや、

跡「敵ならんには一泡吹かせん、雑兵物見致せト震ひながら眼を見張りて云付れば、

○「敵と聞いては皆々「腰が立ち申さぬ

ト震ふ

跡「それがし逆も其通り、イヤ立ぬ事があるものか

「ハテ敵か味方か、味方あらばよし、敵ならんには此の野陣、馬蹄に

かけられんは必定あり、者共合戦の用意せよ

皆々「ぢやと申して此の通りく

ト腰打ぬかしたるを見て

跡「ヤア言語同断、追々近くはく

調「イヤどうやら見覺ある馬印

ト前面を見渡したる折しも、小宮山甲冑にて馳來り、立止りて遙

に此方を見つゝ、

小「其に渡らせたもふは武田方の人々と見受け候ふ、我君の御先途見奉

らんと存玄て、小宮山内膳友信只今馳參玄候ふ、御前よろしく御執

次下さるべし、

ト云ひつゝ二足三足進みて地上に坐す、之を見て兩人初めて安堵

の思をなししが、忽ち氣色をかへ

調「ナニ小宮山内膳とか、我君の御不興蒙りし身として

跡「御執次などゝは推參千萬、とくく此處を

二人「立去りをらふ

ト云はれて小宮山つくく、兩人を見て、初めて調閑大炊あるを知

り、毗裂けて髪逆立ち、

小「汝等は長坂入遺跡部大炊の兩人あらずや、此の期に及んでも悔ゆる

を知らず、迷の雲いまだ晴れざるか、先君信玄公以來拔群の恩寵を

蒙りながら、我君を天下の名大將とはちし奉らず、斯るあさましき

運命に立至らしめ奉りし不忠不臣の兩人、よし執次を拒まば頼むま

二人「ナント

小土屋惣藏殿は居玉はぬか、土屋殿、昌恒ぬし

ト高聲に呼はれば

調今に初めぬ汝が倭辨

二人「イデ此の上は

ト刀に手を持くる折しも、土屋惣藏武者振りさましく出来りて両

人を制し

土「ヤレ待ち玉へ御両士、御運の末に及びて味方打とは淺まし〜〜

ト再三留めて小宮山が方に向ひ

土「是は〜小宮山殿には、御不興蒙り玉ひて御恨あるべきに、御

先途見奉らんとすの御志、忠臣のかゝみ、末代の奇特、昌恒深く感

入て候ふ、

小「今は何をか申さん、只いさぎよく打死して、武田の武勇を末代に残

すの外あし、

土「いかにも仰せ候ふ如く、一軍決心能在る、御いとをしや御三方には

疾く小宮山が諫に従ひあば、斯く落止しせろもせろにはあるまゝさ

にど、今日此比は貴所の御噂のみ、此の由申上げなば、君を初め若

君御臺所、いかばかりか喜び玉はん、イデ某御執次仕らん、イザ此

方へ

ト軍扇をもてさしまねけば、小宮山打うあづいて進み来るを調閑

大炊さへきらんとす、土屋は

土「ハテ心なの人々や

ト制しつゝ、互に睨み合ひて幕の中に入る、調閑大炊は跡を見送

り

調「ハテ胸わろき奴かな、イカに大炊殿、彼様ある不忠者参りし上は、

我々の智謀勇畧も、一々彼に説破られて用ひ玉はざるべし、

跡「去れば、殊に今は敗軍盛返さんやうあき武田の微運、打死は今日今



宵に迫れり、君子は危に近よらずとかや、イデ諸共に落延びて、後

調「いかにも三十六計逃ぐるを上策とす、

二人「それ

ト彼方をさして逃げぬを見て、雑兵ども呆れ果て

○「ヤア長坂跡部の両士ですら、逃げたもふ上は

□「我々の忠義立はいらぬこと、皆の衆

皆々「ござれ

と云ひつゝ、跡をも見ずして逃出しけり、からにて返し

(二) 鎧着の式

同玄田野と云ふ處に定紋の幕打られたる中に鎧櫃を置きて、其上に誦  
防法性の御兜を飾り、其此方に武田勝頼赤地の錦の直垂に、黒糸の  
鎧着て、風折鳥帽子をいたゝき、敷皮の上に坐したるが、弓手の方

には御臺所桔梗の前と、土屋女房一枝子を抱きて居並び、右手の方  
には、一子太郎信勝、赤地の錦の直垂に、腹巻脇當して甲冑は着ず  
次々五才にされる土屋惣吉、阿部、秋山、温井の四士、同玄く鎧着  
て侍りたり、

勝「にくみても憎むべきは小山田が裏切、飼犬に手をかまれしこそ口惜  
しけれ、

信「其日館に火をかけて、城を枕に焚死さば、斯る後悔はあるまじきに

御臺「寄邊なきさの葉小舟、ハテ甲斐もなき

三人「浮身かな

ト顔見合せて無念に堪へざる折しも、土屋下手より進出で、勝頼

に向ひ

土「御目通を遠ざけ玉ひし小宮山内膳、君の御先途見奉らんとて、家人

少々引具し、只今馳參候ふ、如何はからひ申さんや、

と聞き玉ひて信勝御臺所はうれしげに

二人「ナニ小宮山が参りしとか、

勝合す面はあけれども、とくく是へ

とや、面目あげに宣へば

土ハ、

ト下手に向ひ

土「内膳どの、我君の召され候ふ、是へく

小ハ、

と答て、小宮山内膳御前に進みて御三方に一顧し、しばし御顔そ  
打まもりて言葉あかりしが、やがて目をしばたき

小「我君日比は左こそそれガしをにくさものと思召しけり、御めがねに  
はたがひ候へども、御先途見奉らんと存ぞて、取物も取あへず、御  
跡を慕ひて此まで馳参り候ふ、

と申上ぐれば勝頼今更面目なげに、默然としておわし、が、ほろ  
りと落つる涙一車、

勝「たのもしき汝が心底、過分く、

と只一言おほせしまゝうつぶき玉へば、居並ぶ人々御心を察し奉  
り、顔見合せて大息つく、折しも軍卒一人出来り、

卒「土屋どのに申上げ候ふ、長坂入道跡部大炊の兩人、只今何地とモな  
く落失せて候ふ

人々是はと驚くうちにも、勝頼眼を怒らし玉ひ、

勝「ナニ調閑大炊が落失せたりとか、大恩身に餘りながら、此の期に及  
びて主を見棄つるとは、にくみても憎むへき彼等兩人、ソレ追かけ  
て成敗せよ、

ト狂ひ玉へば秋山温井

二人「心得候ふ

ト立んとするを土屋呼留め

土「アイヤ人々待ち玉へ

二人「ちやと申して不忠不臣の彼等兩人

土「ハテ言ふ事あり、御待ち候らへ、彼等如き人非人、何百騎残ればと

て、物の用には立す、よし一旦此處をのがれても、天いかで斯る人

非人を見のがし玉ふべき、やがて見出されて織田勢の槍先に掛らん

は必定、其儘に棄置かれよ、

ト云ひて感慨を催ふし

土「恩寵を蒙りし兩人は逃失せ、御不興蒙られし小宮山どのは討死と覺

悟して追付き玉ふ、

勝「忠不忠天地の相違、斯る忠臣ありながら、武田の家の亡びん事、思

へば我身の不明によれり、

トうつぶさ玉へば

小「日比忠臣に見えしものも、一期の御大事に及びては、調開大炊が如

きもの世にいくらもあらん、過ぎし昔は悔ひて返らず、只此上は入

々いさぎよく討死なして、適名を末代に残されよ

ト云ふを聞きて土屋無念の涙をしのびしが、忽ち立ちて我子惣吉

を膝下にしき、短刀抜く手も見せず胸元ぐざと刺通し、死骸をが

ばと投棄て、涙を揮へば、是はと驚く女房馳寄りて屍骸を抱きあ

くるに、勝頼其外人々も打驚きて、

勝「ヤア何故あつて土屋には、

皆々「我子を手にかけてたるぞ、

と問へども土屋は目を閉ぎ、默然として答へず、女房摺寄りて

女「エ、此はマア何事、御身は物にばし狂ひ玉ひしか、如何ある仔細わ

るか知らねど、罪もなき子を現在の、親が手づから殺すとは、情

まい、く、たけさばかりが武士か、情を知らぬは武士にあらじ、

先づかうくと譯を語りて納得させ、其上殺し玉ふとも、よも卑怯にはあらず、未練とも云はれぬ、如何すれば幼なきものを、コレ其様にむごたらしう殺し玉ひしぞ、譯を語りて聞せ玉へ、

小「仔細を語れ  
皆々「土屋昌恒

ト問はれて土屋涙を拂ひ

土「ハッ君を始め奉り人々の御不審は尤、語らんも無益なれとも、人は妻子にこそ心ひかるゝものあれ、我の命を鶴の毛にたくらべ、妻子珍寶を塵芥の如く思へども、小山田の變心、調閣大炊の逃失せたるにつけても、君の思召し、小宮山どの始め人々の疑ひ、我身に掛らんことこの恥かしさに、彼様に身のほだしを切捨たり、

女「エ、  
ト泣く

勝「スリヤあの人々の疑心を解かん爲に、

小「御心中より、古今ためし稀ある義心のはど、  
皆々「天晴く、

ト皆感し入りたるばかりなり、一枝は又も

女「斯るべしとは露知らず、恨みあげしは、妾があやまり、親の義心をあらはす爲に、死したる若は打死同然、去りながら親に先だち一人、死出の山路に嘸ぞや迷はん、不便やナ  
ト泣くを土屋は制して

土「をくれ先だつからひ同じからねども、遂にゆくべき道は一つ、おめかなしむべからず、死したる若も父をうらみあ、やがて我も追つかん、主親の爲に三途の川の瀬踏せよ、これ一枝、懐にいだきたる、若が妹二才にされるを其方には取らす、此の世の縁は是までありとく何方へも落ちよかし、

トさどせば一枝は首をふり  
女「情なき人の言の葉かき、若にはなれ、御身に別れ、何を樂みになが  
らへん、

土「愚なり女房、君を始め奉り人々の後出をとむらふも一つの忠義、如  
何なる岩の間にも世を忍び、尼ともなりて菩提を吊らへ、  
ト云ひて又も下手に向ひ

土「誰かある馬引け  
卒「ハッ

ト答へて雑兵馬を引出れば、土屋泣入る女房を引立て、  
土「汝も武士の妻ならずや、見苦し涙ををさめよ

女「武士の妻なればこそ同玄道にとは申せ、只一人此處を落のびさば、  
アノあれを見よ土屋が妻ハ、命をしさに主を棄て、夫を棄て、落失  
せたりと、世上の誹をうけんこと、いかばかりか心苦し、願ふは此

のまゝ供し玉

土「ヤア物其數ならぬ女の身の、沙汰も批判も入らぬ事あり、先程も申  
聞し、如く、生きて御菩提を吊ふも忠義の一つ

ト云へば御臺所信勝も女房に向ひ  
御「其方があげきは去事ながら、主従尽く亡びあは、誰か残りて菩提を  
吊はん、

信「汝一人は此處を落ちて、主従一統の  
皆々「菩提を吊らへ

ト宣ふうち土屋は女房を後向に馬にくもりつけ  
土「何處へありとも馬の向ふ所へ落行けかし

ト一鞭あつれば  
女「お去らば

皆「去らば

ト名残をしげに見送り見返るうち、馬は彼方をさして馳ゆく跡見やりて

勝「返へすくも我故に、浮目を見する不便さよ、

信「さてもかなしきは弓矢取る身の

皆々「習かあ

ト云ふとき聞ゆる関の聲に、勝頼屹度面をわけ

勝「スワ敵間近く押よせたると覺わたり

御「斯るべしと知らば、新府にていかにもあるべかりしものを、なまぞ

い生のびんとして、かばねの上の耻辱を重ねんこと、返すくも口

惜し、

勝「我も左こそ思へ、唯々あまりに御身のいたわしさに、都留の郡は相

撲に近ければ、御身を故郷に送り返さばやと思ひ、夫故に小山田に

もたばかられたり、今は我身はともかくもありなん、御身は今年二

十一、咲出し花を天目山の夕嵐に散さんもいと惜し、是よりとくと

く故郷さがみに歸り、我後世を吊ひ玉へ、

御「うたてきことを承り候ふものかあ、軍敗れたればとて、いかでをゆを

め故郷に歸り、兄氏政に面を合さるべき、玉の緒のたねあはたねよ

一つ蓮の盟はかはらぞ、

勝「いしくも仰せけるものかあ、我も御身の心斯あらんところ思ひたれ

其につけても我不運の爲に、新羅源氏の流かれんこそ口惜しけれ、

如何に信勝、汝は是より杣樵の通路をたづねて、奥州にのがれ、時

節を待ちて薙をわけよ、

と聞て信勝色をわけ

信「此は父上の仰ども覺ゆ申さず、落ちんとおぼさば父上あそ落ち玉へ

某は武田の物領、敵に後を見せがたし、

勝「けちけちあるかあ信勝、去らば汝と共に打死せん、去りながら汝生れ

て十六才、武田の家督にもなをらずして、討死させんこと不便なり  
殊にいまだ鎧着の式をも行はず、よみぢのさわり、今生の恨此の上  
あし、いでや其式を行ふて後切死せん、昔より武功すぐれし者を頼  
みて鎧親とする習ひ、小宮山内膳友信信勝が鎧親頼むよ、又土屋  
惣藏秋山紀伊は後見の役、

小「身不肖なる某、若君の鎧親仰せつけられ、家の譽此の上も候はず、  
土「若輩の身として大禮にあづかり、分よ過きたる身の面目、

秋山「雖有く  
三人「存ぞ奉る

勝「ソレ用意せよ

ト命じ玉へば、土屋秋山立ちて鎧櫃より鎧を出し、櫃の上に胴立  
を置き、甲冑を東向に飾り、下手より廣蓋に母衣及び弓、團扇、  
白鉢巻など持來り、櫃の左手に置けば、信勝は東に向ひ、鎧親

は南に向ひ、進んで信勝の髪を乱して白鉢巻をさすやがて後見共  
々に腹巻、上帯、籠手、袖、太刀、脛當、冑母衣を着せ  
まゐらすれば、信勝左手に弓を杖さ、右手に團扇を持ち、  
左の足にて三たび足拍子を踏んで床机に腰をかく、小宮山之  
を見て

小「そも武田の御家に傳はる楯無の鎧と云ツバ、其昔八幡太郎義家  
朝臣、後三年の合戦に召させ玉むしを、御舍弟新羅三郎義親朝臣、  
官を棄て下向ありしを賞せられ、即ち此の御鎧を譲り玉ひ、其よ  
り累代武田の御家に傳はつたり、斯るめでたき御鎧を着させ玉ふ信  
勝君は、弓矢神も守らせ玉ひ、御武運長久あるべきに、着初其まゝ  
御打死、

土「世が世ならんには、三献の御祝義法の如く、御引出物山あすばかり  
御家臣一統萬歳を祝して、花々しき御祝あるべきに此は又野末に屯

して形ばかりの御式、

信「其も信勝が不運、嘆く勿れ、まさしも重代の鎧を着して、打死せん

は今生の思出、喜ばしやく

勝「さても天晴健氣ある武者振、我子あがらも末頼母しき武將の芽生、

御臺「花をも咲かせず枯果て玉はんこそ、返すくも

皆々「いと惜しけれ

と云ふ時又も聞ゆる鬨の聲に、人々立ちて鎧の上帯引しめつゝ、

信「敵不意に切込んだりと覺ゆたり

土「矢種のつゝかん限り、さしつめひきつめ射ころして

小「矢種尽きなば短兵急に、切てく切りまくり

秋「花々しき合戦して

阿「末代までも武田勢が

温「武勇の程を

皆々「知らして呉れん

ト云ひつゝ獲物くを打振りて、敵をめがけて飛んでゆく、勝頼

一もりくて遙に見渡し

勝「いでや最期の軍をせん

ト叫ひて馳ゆく、此方には御臺所懐劍咽に突立てゝ、

御「アッ

ト苦しむ聲に見返る勝頼、御臺所は鎧櫃に取すがりて、いと苦し

げに打見やれば、遙に猛き勝頼も、名殘惜しげに見返りく、思

切りて馳去るとき、がつくり落入るを木の頭に山幕を落す

(三) 打死

鬱蒼たる天目山中、老樹天を掩ひて晝猶暗し、矢叫の聲打物の響山

を動かし天地に轟き、すさまじき言ふばかりあし、斯る處へ土

屋昌恒大童とあり軍兵と切結びつゝ出来る、遂に追散らして屹度敵



勢に向ひ

土 遠からんものは音にも聞け、近くば寄りて目にも見よ、是は武田の家の子に土屋惣藏昌恒とて、強弓の精兵、矢續早の手利なり、我矢面に敵は難ふま玄

ト云ひつゝ、矢を番ふとき、上手より勝頼、下手より信勝、各軍兵と戦ひつゝ、出来るを見て、土屋引返し、三人共に敵を追退けて顔

見合せ、

信 父上か

勝 信勝か

土 今は是までと覺ゆ候ふ

二人 土屋介錯

土 ハッ、畏り候ふ

ト云ひつゝ、用意して腹切らんとする處へ、小宮山内膳生首三ツ四

ッ腰につけ、手にも一ツ持ちて、敵と戦ひつゝ出来り、

小 何れも其にわたらせたまふか

ト此方を見てかしくまれば

勝 オー小宮山か、主従諸共に死出三途のかしま立、

小 仰にや及び候ふべき

ト云ひつゝ、御傍に進めば

信 小宮山介錯頼む

小 畏り候ふ

ト聞て勝頼信勝、諸共に切腹すれば、小宮山土屋涙ををしぬこひ

つゝ

二人 御免

と一禮して首打落す、二人首を岩の上に置きて念佛幾度か唱へておのゝ首をかくし、立戻りて

土「今は此の世に思置くことよし、イデ敵陣へ切入らん

小「アイヤ惣藏昌恒、餘に多く人を殺さば、我身の後世をそろしかるべし

此上は差ちかゝて死せん、

土「實に尤、御二方の待ち玉はん、死出の山路の露拂ひ

二人「イテく

と云ひつゝ、兩人差ちがゑ

二人「へ、ハハ、

ト笑ひながら息絶ゆれば、寄手の大將織田信忠、立烏帽子鎧着て

軍兵引連れ出來り

信忠「強將の下に弱卒あしとかや、敵あがら速大剛の武士、ハラいさまし

き最期かあ、者共勝聞く、

皆々「エイくヤア

よろしく打込にて落



(をわり)

明治二十四年十二月廿五日印刷

著者

大阪市南區北橋谷二百九十九番屋敷

四寸

定價拾錢

明治二十五年一月一日正  
午十二時より開場仕候

浪華座主

秋山儀四郎

四方御客様